藤原親盛について

――後白河院周辺の歌人――

松野陽一

藤原親盛は、後白河院に「北面下臈」として近侍して活躍した人物である。[注1] 歌人としては二流どころであった為か、ほとんど研究の対象となっていない。しかしながら、当代の地下歌人としては歌界活動にかなりの事跡を残しており、あまり和歌に熱心ではなかった後白河院の近辺では例外的な存在であったことや、歌林苑会衆との交渉などに注目すべき点も持った人物であるので、若干の素描を行なってみたい。

経歴も明らかでない点が多いが、父は、久保田淳氏の説かれる如く、長良流の大和守親康であったらしい。生年は不明であるが、家集所収歌中で最も詠作年時の早いことが確認される歌会が「四条宰相親隆入道会」であり、その親隆の歿したのが永万元年（一一六五）八月二三日（顕広王記）であることから、仮にこの歌会の開催をこの永万元年とし、親盛が詠作可能年令、これも仮に二〇歳前後とすると、保延二年（一一三六）頃の生れということになろうか。この歌会の詠作年令をこの年令に比定したのは、後述するように、この後作品が連続して見えるようになるのが承安元年（一一七一）以降のことで、それまでやや間があり、一応水準に達していた歌人の大半が招かれた住吉社歌合（嘉応二〈一一七〇〉）、広田社歌合（承安二〈一一七二〉）に名の見えぬところを見ると、永万元年頃はまだ無名の時期に当り、格別の記念すべき追憶から家集に取り入れたもので、歌人としての出発点として意識されている歌会なのではないかと想像してみたからである。この仮年令によると、承安元年六月の住吉御幸歌会が二六歳、治承二年別雷社歌合が三三歳、同四年の福原遷都の時が三五歳、寿永元年に家集をまとめたのが三七歳、建久三年後白河院崩御に際して出家したのが四七歳（この時大和守だった。従五位下あたりか）[注2]、最終事跡の正治二年石清水社歌合の折は五七歳だったということになる。法名は見佛。賀茂重保が月詣集撰進に先立って賀茂社奉納の目的で三十六人の歌人に依頼した百首型式の家集（いわゆる寿永百首）の一つである「藤原親盛集」を自撰し、私撰集「百題抄」（散佚。和歌色葉・八雲御抄）があり、

数度の歌合の主催・運営に当り、堀河題百首を詠ずるなど、歌人としての一通りの事跡は遺している。交遊圏は主として、後白河院関係のグループと歌林苑（但、後期の賀茂社中心時代）グループであり、歌集中の道因との贈答歌

左衛門尉になされて侍しころよろこひおもふなともて
（道因）
ひにそへてかくさかへゆくきみこそはうたのはやしの花とみてけり

返し
いとゝしくおもひのみこそひらけぬれうたのはやしの花ときくより

の中の「歌の林の花」が（儀礼的な意味をもつのは無論だが）、歌人としての仲間意識から用いられた表現とすると、歌林苑グループ中でも一応目ぼしい立場にいたことがうかがわれるように思われる。歌才というよりも、権力者後白河院に近侍していたことが、交友関係における立場を有利にしたものと考えられるが、小侍従、西行あたりと交渉を持っている点は注目してよいだろう。

寿永百首である家集の集載歌会・歌合・百首歌を整理すると次の如くなる。なお、後白河院周辺グループの歌会をA、歌林苑関係をB、その他をCと表示しておく。

①C四条宰相親隆入道会（永万元・8・23以前）　依花猒雨、海辺卯花、松風秋近、会無実恋
②A住吉御幸会（承安元・6・1？）　祝
③C東山詩合（教長入道歌合。承安2・閏12）　隔川恋
④B賀茂歌合（治承2・3・15）　霞・（花）・（述懐）
⑤A日吉歌合（治承2・8・23以前）　花
⑥C大僧都範玄歌合（治承2・8・23以前）　山路郭公
⑦A福原遷都（治承3・8頃）
⑧C三井寺（山家）歌合（治承4・5以前）　春夜月
⑨C高野教長入道会（治承4・10・15以前）
⑩B俊恵七十賀会（養和2・春）
⑪A新熊野会（寿永元・5・5？）　郭公・盧橘近薫
⑫A中将有房会（有房八幡社歌合）　橋辺霞
⑬A小松中将資盛会　鶯　月影　絶後悔恋　夜過関路
⑭C百首（堀河百首題）　若菜　槿　九月尽　葦　氷　除夜　忍恋　鶴
⑮B賀茂歌合　羈旅郭公
⑯B賀茂会　関路螢　八月十五夜　秋野残菊　水辺落葉　引構結縁　楽
⑰B賀茂にて　恋
⑱A天王寺御幸時会　鹿声遠聞　旅宿月
⑲A地下歌合（院北面歌合）　海上月　山路恋
⑳A供花会　旅宿暁秋　行不遇恋
〔付〕家集以外の資料によるもの。
㉑B賀茂社後番歌合（元暦元・9。千載集）
㉒A親盛入道歌合（玉葉集・隆信集）
㉓C経房家歌合（建久6・正）
㉔C石清水社歌合（正治2・12・28）

右の整理は詞書の表記に拠ったものであり、厳密な考証を経たものではない。したがって、例えば⑮～⑰の賀茂社関係の歌会は一括すべきものかもしれないし、⑯も更に細かく二種以上に分属せしむべきものかもしれない。不明な点は多いのであるが大凡の傾向をうかがうことはできるように思われる。なお、家集の成立は、月詣集成立の寿永元年十一月以前、同じ寿永百首の経盛集・経正集は同年六月に成っているから、ほぼ同年夏～秋と推測され、⑫～⑳はそれ以前の事跡ということになる。

A〔後白河院関係の歌会〕

後白河院関係とはいっても、②住吉御幸会、⑪新熊野会、⑱天王寺御幸会、⑳供花会の如き、院自身がかなり直接の関わりを持った可能性のある歌会と、⑤日吉歌合、⑫有房八幡社歌合、⑬資盛家歌会、⑲院北面歌合の如き、このグループに属した人物が主催したと推測される歌会の性質は多少異っていよう。前者の②⑪⑱は院の寺社御幸に扈従した院近臣達の歌会である。有名な三四度の熊野詣を初め、院の寺社参詣は数多かったが、そうした際に従った近臣等によるかような催しは多かったのであろう。後述する⑪新熊野会の他にも、檜葉集には

後白河院御時、今熊野御八講ツトメ侍ケルニヨミ侍ケル
権大僧都勝詮

ミクマノヽウラノハマユウコヽノヘニカサネテキミソナカメマシケル

の一首が見え、同趣の会が多かったことを推測させる。なお、後白河院の今熊野社参篭の際の御八講には、安元元年六月十七日、治承二年十一月八日（いずれも玉葉所見）の例が知られるが、この歌は祝賀の歌意からして、中宮御産祈（安徳天皇誕生）の性格を持っていた後者の際のものと考えてよかろう。供花会については別に集成したことがあるので省略するが、[注3] 承安～治承にかけての頃、夏・秋の二回、各二題の結題の歌会が定例に催されたらしく、院のほか、重家・頼政・俊成等の一流歌人、親宗・広言・有房・頼輔・隆信・親盛等の寿永百首歌人の出詠したことが知られている。

後者の⑫有房八幡社歌合、⑬資盛家歌会は全くの推測による認定である。⑫は『平安朝歌合大成』四三六に集成されているが、親宗、師光、有房、親盛の出詠が知られている。親宗集に「有房朝臣の八幡にて歌合せむとて歌を乞ひしかば」とあるところから、有房の主催歌合と認定されているわけであるが、有房集に見られる交友関係から、資盛ら平氏の一部を含めた院関係グループの歌会と考えておくわけである。⑬は別に集成したことのある寿永元年頃に成った二種の資盛家歌合との関係によっての推定である。この二種の歌合とは、草花・月・恋の三題で有房・親宗の出詠しているa歌合と、梅・五月雨・鹿・千鳥・恋の五題で、俊成、隆信、寂蓮、季経、定家、小侍従、実定、師光、寂超らが出詠し、俊成が判者であったb歌合とであるが、この⑬はa歌合とほぼ性格を同じくする小規模な催で、⑫にも共通する院関係の構成員によった歌会と推測されるわけである。そして、⑤日吉歌合と⑲院北面歌合は、これらに近い性格をもった親盛主催の歌合だったものと考えられるのである。このうち⑲院北面歌合の方は、『平安朝歌合大成』四三九に集成されたものであり、月詣集所収の源仲頼歌の詞書「藤原親盛院の北面にこれかれ勧めて歌合し侍りけむ、河辺の虫といふことをよめる」を手がかりにして、親盛集、玄玉集所収歌も合せ、河辺虫・海上月・山路

恋の三題と仲頼・藤原兼康・親盛が集成されている。厳密には同一歌合資料といえぬ要素もあるが、かなり規模の小さな催だったと看做してよいかと思われる。⑤日吉社歌合の方は、やはり『平安朝歌合大成』四一九に集成され、既に稿者も検討を加えたことがあるが多少問題があるので後に詳述することにし、後白河院権力を背景にした親盛主催の歌合で、歌林苑会衆の参加に特徴がある歌合である点のみを確認しておくこととしよう。

なお、家集所収歌ではないが、㉒親盛入道歌合もここに組み入れてよいかもしれない。この歌合は『平安朝歌合大成』四五五に集成されているが、玉葉集（勝命法師「千鳥」又は「月前千鳥」）、類従本隆信集（「恋」・「雪」）の三首が同一歌合のものとすると、或年の冬季の催でもあろうか。然して、隆信集の二首が寿永百首である書陵部本隆信集に見えぬところを見ると、寿永元年七月頃以降の冬、そして、勝命の事跡は元暦元年九月の賀茂社後番歌合（この年七三歳）が判明する最後のものであるから、この前後に成立した歌合ということになろうか。類従本隆信集の詞書に「親盛入道歌合し侍りしに」とあるが、これは同集成立時点からの表記と見るべきで、親盛出家の建久三年以降に成った歌合と見る必要はなかろう。後白河院存命中に、その近従者として主催した歌合であったと推測しておきたい。

B〔歌林苑関係歌会〕

地下・隠遁者・女房らの和歌愛好者が、文芸愛好意識とその狂言綺語観とを核としてグループ活動を行なった歌林苑会衆の事跡は、当代和歌史の重要な特色として注目されるが、諸種資料によると、保元～治承にかけては俊恵の僧房が、その後の寿永～元暦にかけては重保の賀茂社が中心の舞台になったようである。注4 その点からすると、親盛の場合は、後半の賀茂社中心の時代になってからの参加のようで、④⑩⑮⑯⑰㉑はいずれもその例証といってよかろう。但、⑤日吉社歌合は、先述した如くAに属せしめたが、構成員の主体は歌林苑会衆であったようで、院権力を背景にしたこうした歌会の主宰で俊恵・道因らとの関係が生じ、後にこのグループの歌会に参加するようになったものと思われる。

C〔その他〕

①親隆家歌会は前記の如く、最も若い時の歌会であり、主催者との特別な人間関係による参加かと思われるが、詳細は判明しない。前記集成には冬題が欠けているが、四季・恋より成る五題構成の歌会だったのであろう。③⑨の教長入道会は、晩年の教長の出家生活の中での、歌壇からかなり自由な立場で多方面から参加者を迎えた歌会であると思われる。構成員の主体は歌林苑会衆であるが、親盛にとっては、③の承安二年という時点は、まだ歌壇活動の初期に属するものと思われ、歌林苑グループの一員としてではなく、同家歌会の開放的性格から参加したものかと思われる。⑧三井寺山家歌合も教長（判者）と関係深い歌合である。参加者の一人長慶（教長男）は、歌集書写に関して後白河院と関係をもち、人脈的にも娘が高松院右衛門佐で、高松院（父鳥羽院、母美福門院）を通じて後白河院に近そうなこと、親盛だけが唯一の俗人の参加者であることを考慮すると、この歌合はむしろAに属せしめてもよい性格をもっているかもしれない。注5 ⑥範玄歌合も、俊恵・季経・有房・親宗といった構成からすると、③教長歌合に近い開放的な性格をもった歌会と見てよかろう。即ち、承安から治承初年にかけて、歌人として一応の処

遇を受けるようになったことを示している。㉓経房歌合、㉔石清水歌合は、出家後の彼が、建久・正治期の後京極家、土御門家、後鳥羽院等の一流歌壇には招かれないが、もう少し周辺にまで拡大されたやや開放的な歌会には昔日の余光で参加し得た晩年の状況を示す資料だといえよう。なお、⑭百首は八題しか歌題が判明しないが明らかに堀河百首題であり、それを寿永元年夏以前に詠じていることに注目しておこう。

以上を綜合すると、承安頃から開放的な歌会を通じて歌人としての処遇を受けるようになったが、後白河院権力の背景を利用した歌会の主宰などから歌林苑有力歌人との密接な関係が生じ、寿永～元暦にかけては賀茂社会衆として活躍した。建久の院崩御後は上流歌壇の構成員たり得ず、周辺の歌会に辛うじて名を残すに留まった、ということになるかと思う。

次に、前に略記しておいた二つの歌会について若干検討を加えておきたい。

〔新熊野社歌会〕

先ごろ刊行した拙著『藤原俊成の研究』の中で、『近来風躰』に「新熊野歌合に、俊成卿判云、夜もすがらの詞、頗不可庶幾」と見える俊成判の歌合が、親盛集中に見える「新熊野会」の注記を付した「郭公」「盧橘近薫」の二首の歌会と同一のものではないかという仮説をのべた。新熊野社は、後白河院が勧請した社で、永暦元年十月十六日に新日吉社と同時に御所法住寺殿の境域内に社殿が成り、遷宮の儀が行なわれていること、親盛が後白河院近侍の人物であること、判詞の「夜もすがら」の語が夏季歌の表現らしく、親盛集の二首の夏期題と一致しそうなことなどからの推測であった。ところでその後、平親宗の家集（寿永百首）にもこの会の歌らしいものがあることを知ることができた。（洋数字は古典文庫番号）。

今熊野にて人々会し侍しに、社頭菖蒲の心を

33なぎの葉ものきのあやめもみどりにてあけのほくらはなのみなりけり

盧橘近薫

34橘のはなちるしたにまとひしてむかしをしのふむつことそする

今熊野御参籠之間人〳〵哥よみ侍けるに、郭公依恋（マヽ）といふ心を

103なか〳〵にきなかぬよひはほとときすしぬはかりにはなけかさりしを

平親宗は、時忠や建春門院滋子の弟に当り、人脈的には清盛一門に近いはずであるが、後白河院近臣として活動した為か清盛らに疎まれ、治承四年の福原遷都の折には新都への同行を許されぬ（家集）といった経歴をもった人物である。近臣として院の今熊野参篭に侍し、親盛らと歌会に参加した可能性は充分あるであろう。33・34と103は同一歌会とは限らないが、34と親盛集の「盧橘近薫」の一致は、まず同一歌会と見做して差支えないであろう。とすると、この歌会は、33の「のきのあやめも」の表現から、五月五日にそれに近接した日の張行である可能性が強い。後白河院は永暦元年四月十三日に新造の法住寺御所に移徒されたのであるが、前記の如く同年十月に同御所域内に新熊野・新日吉両社を勧請した。そして、本地の近江の日吉社にはこの年三月一四日、熊野社へは十月二三日が第一度の御幸となっている。両社への信仰の深まりが院権力の強化の時期に

重なっていることは疑いない事実であり、この後に度重なる本地自体への御幸に見取れる熱意が、一方では身近な加護を求める心として働いて両社の勧請にもなったのであろう。院の新熊野への御幸、参篭の記録は諸資料におびただしいが、出雲路敬和氏編の『今熊野観音寺史』（昭和47・6刊）の集成に拠ると、夏期で、寿永元年の寿永百首成立以前の例としては

安元元・6・17（玉葉）、安元2・6（玉葉）、治承3・4・6（山槐記）、寿永元・5・15（玉葉）、

などがあげられる。参篭の日数などは時によって区々であるが、寿永二年六月の場合などは一〇日にも及んでおり（吉記）、その点からすると、前記「のきのあやめ」の表現が関係し得る蓋然性の最も大きいのは、寿永元年五月の場合ということになる。但、この歌会と、親宗集103歌の会、それと親盛集「郭公」題の歌会、さらには『近来風躰』の俊成判の歌合が重なるか否かは依然明らかにはし得ない。しかし、確認し得る資料の全てが夏期題であることは、同一歌合である可能性も考えておかねばならないであろう。

なお、寿永百首である広言集の次の一首、

世の中静かならず侍りしころ、宗円法橋しのびて歌合すとて懐旧歌こひて侍りしかば、つかまつりし

世の中を思ひみだるゝたびごとに昔をのみぞしのぶもぢずり

は、宗円が新熊野社第二代別当（第一代は父の弁宗）であるところから、後白河院関係者の密々の歌合だったと推測され、右の新熊野社歌合とも何らかの関係があることが考えられる。

〔日吉社五首歌合〕

この歌合は『平安朝歌合大成』四一九に集成され、前掲拙著にも触れたところであるが、検討を要する点が若干残されているので、とりあげておきたい。萩谷氏の集成された一七人、三八首の資料から判断すると、桜・郭公・月・雪・恋の五題の歌合で、俊成が判者であったらしいが、隆房（続古今）、顕昭（夫木抄）の資料には「日吉社恋五首歌合」とあり、また、季経集には「新日吉社歌合」という異伝があったりして不明な要素が残っていた。これを決定的に整理する用意はないが現段階での私案を示してみたい。まず、寿永百首という同一時期成立家集を基本において考えると、頼輔・親宗・広言の三人の一四首は同一歌合と見なしてよいと思われる。成仲・親盛・経正も一題ずつではあるが、寿永百首の縁でこれに準じてよいかと思われる。有房集と実家集も成立の近さから、ほぼ含めることに妥当性が認められよう。また、親盛集の贈答歌から道因が参加したことが明らかであり、その道因歌の一首が負歌になったことを慰める俊恵の歌が続千載集に載っており、林葉集所収歌五首の題は全て他と一致するから、俊恵も参加者と認めてよいと思われる。この俊恵が認められるならば、和歌口伝の資料的価値が保証されるから、登蓮の出詠と、判者が俊成であったことも信用し得ることになる。そして、判者俊成が確認されれば、夫木抄の光行も入れてよいことになりそうである。[注6] となると問題は残りの、季経、隆房、顕昭、慈円の四人である。このうち、「新日吉社歌合」とする季経（寿永百首）の四首は、歌題の一致から、萩谷氏の説くように別の歌合歌とは考え難い。親盛集によって、本歌合の結構は親盛が行ったことは明らかであり、親盛が後白河院関係者であることから、新熊野社・新日吉社で何度か行なわれた歌合が念頭にあって、出詠のみで参加しなかったといった事情でもあったとすれば、季経が家集

編纂に際して誤記したと考えられなくもない。隆房・顕昭の「日吉社恋五首歌合」は別種の歌合とすべきではないであろうか。また、慈円は治承二年八月以前の時点では伝記上も人間関係からも若干疑念があり、彼がその後日吉社で歌合を催す可能性は充分あるので、これも別種の歌合と考えておきたい。いずれにせよこの歌合も後白河院関係者による催なのであり、そのために親盛の果した役割が大きかったこと、俊成が共に判者となったことが和歌史的に注目されるわけである。

注1・2　久保田淳氏「新古今前後研究断片(二)――藤原親盛の出家」和歌史研究会々報23号（昭41・8）。

注3　『藤原俊成の研究』七一〇ページ。

注4　昭和48年度和歌文学会・中古文学会合同大会で発表した「寿永百首について」で述べた。

注5　注3拙著参照。

注6　治承二年の時点では光行は一六歳であり、やや若すぎる難のあることは注3拙著にも触れたが、続拾遺集・雑春513・514には次の如き贈答歌がある。

大内の花み侍りけるに人のもとよりあらぬさまの申して侍りける返事に　源光行

尋ねきてふみ見るべくもなき物を雲居の庭の花のしら雪

返し　法眼宗円

誘はれぬ今日ぞ知りぬるふみ通ふ跡まで厭ふ花の雪とは

無論、何時の贈答とも判明しないが、宗円が前記新熊野社別当であることを思えば、両者の関係が後白河院関係者の歌会である新熊野・新日吉での会を通じて早くから結ばれていた可能性があり、光行の参加が不自然でないことを認めてよいのではないかと思われる。

なお、この歌の詞書の「大内」は法住寺御所の可能性も考えられ、後白河院関係者としての両者の交際の密なることの徴証と看做してもよいかもしれない。また、新勅撰集・雑二1195の宗円の歌「わかのうらにしられぬあまのもしほぐさすさびばかりにくちやはてなん」は、1194の平行盛歌との関係があるとすれば千載入集の願望歌の可能性があり、前記両歌合を通じての俊成と宗円の関係をうかがわせて興味深い。